

小学校英語活動導入のあり方

- より多くの小学生に英語活動の機会を与えるために -

江原 美明¹ 青柳 美貴子²

平成14年度から、公立小学校で小学校英語活動が実施可能になった。取組状況は小学校によって温度差がある。だが、日本の英語教育への影響を考えると、ある程度の平等性を確保する必要がある。本研究では、どの小学校にも導入可能な英語活動の形態について、調査研究協力員の実践報告をもとに考察した。

はじめに

「小学校英語活動」は必要なのか、総合的な学習の時間の趣旨に合うのか、という議論がなされる。導入については、各学校の判断に任されている。言語習得理論や社会心理学の知見からは、幼児期に外国語を学習することは、その言語の習得に好影響をおよぼすだけでなく、異文化への受容性が高まるという研究結果が報告されている。グローバル社会を迎える日本にとって「英語」が重要であることは確かである。

しかし、誰が・何を・どのように・年間何時間教えるのかについては全国的な基準が無く、さらに総合的な学習の時間のカリキュラム開発と重なって、担当者の負担も大きい。理想論ではなく、現状に根ざした、継続可能な小学校英語活動の導入の在り方を考える必要がある。

そこで本研究では、小学校教諭4名の協力を得ながら、小学校英語活動の現状と課題の分析、及び授業実践を通じた、現実的な英語活動導入の在り方についての考察を行った。

研究の内容

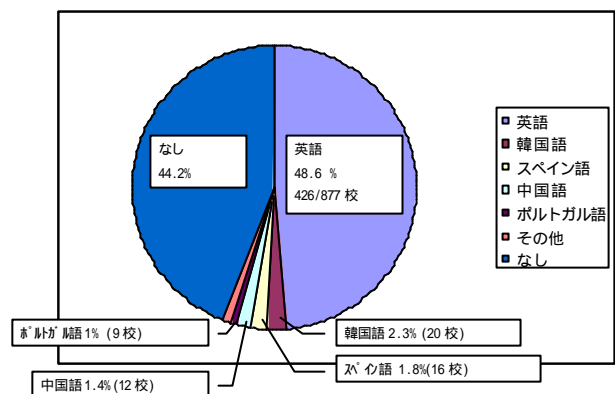
1 現状と課題の分析

(1) 神奈川県全体の実施状況

平成14(2002)年に県教育委員会が行った調査によると、県内877の公立小学校のうち、「英語会話」を行っている学校は全体の48.6%にあたる426校であった。また、韓国語やスペイン語など、英語以外の外国語を扱う小学校もあり、国際化が進展している現状を見ることができる。(図1)

しかし、頻度に関して調査した別の資料を見ると、小学校での英語会話、いわゆる英語活動の実施時間は、「年間1時間～11時間」程度が最も多い。この傾向は

(図1) 外国語会話実施状況
(平成14年 県教育委員会 義務教育課 調べ)



平成15年2月3日に文部科学省が公表した全国集計の結果とも合致している。英語活動の実施回数、外国語指導助手(ALT)などネイティブスピーカーの訪問回数と密接に関係しているためであろう。

平成13年度から、総合教育センターでは小学校英語活動研修講座を実施しているが、参加者(延べ70名)との討議やアンケート分析からは、県内公立小学校における英語活動の現状は以下のように集約できる。

年間1回～11回(学期に1～4回)の実施
[総合的な学習の時間あるいは生活科の枠内で]
担任とネイティブスピーカー(ALT等)の
チームティーチング(進行はALTが中心)
学校によっては、担任によるミニ会話、音声
教材による活動を実施している
ALT・外国人ゲストによる自己紹介やゲー
ムなどの体験活動や国際交流活動が中心

(2) 課題

小学校英語活動を取り巻く諸議論は、「児童英語教育」と「国際理解教育」を結び線を行き来しながら行われている。カリキュラム上の位置づけや、指導目標がまず問題にされるのである。特に、英語のスキル習得を重視する授業は、総合的な学習の時間でも国際

1 研究開発課 教育専門員
2 研究開発課 研修指導主事

理解教育でもなく、「英語科」であり、現行の指導要領での位置づけが難しいとの批判を受けることが多い。

今のところ、教員の観察に基づく英語活動経験者の中学校での評価は、「積極的に聞こうとする態度」、「積極的に話そうとする態度」、「価値観の異なる人と自然に接すること」など、いわゆる態度面での評価が高く（樋口 2001）、英語力というより、「積極的なコミュニケーション態度」の伸長がその主な成果となっている。

しかし、児童は英語活動を通して自然に「英語」を身につける。問題は英語活動の位置づけの議論ではなく、むしろ、各学校での異なる取組の結果、小学校卒業生の英語に対するレディネスに大きな差が出てしまうことである。この、小学校英語活動と中・高・大の英語教育をどう結びつけるかが当面の大きな課題である。

(3) 先行研究からの知見

研究開発学校の実践例は、ほとんどが週1回の英語活動を確保する形で行われているので、一般の公立小学校の現状とは異なるが、今後の授業実践の参考になる貴重な情報を与えてくれる。

研究開発学校の実践記録を数量化し、統計分析した「国・公立小学校における英会話活動の効果に関する分析」（牟田他 平成11年）によると、英語活動の効果を高める要因として、

日本人教員とALTの人間関係、明確な役割分担（これにはチームティーチングの経験回数が影響を及ぼしている）
英語教室や展示物など、学校の雰囲気づくり
日本文化説明など発信型の英会話活動
ALTの存在
年齢（会話は低・中学年で、異文化理解は高学年で効果が高い）

があげられている。特に、年齢による効果の違いはシラバス作成においても留意すべき点である。高学年においては、「わかる」という経験や知的好奇心を満たす活動が大切になってくる。総合的な学習の時間の趣旨からすれば、教科横断的な内容を盛り込むことも必要になる。

また、同分析報告書では、英語活動を経験した小学校教員の「小学校英語教育」に対する意識が、ポジティブ（プラス）なものに変化したことも指摘している。英語活動体験を通して、小学校教員自身が外国人とのコミュニケーションや、それをきっかけとした国際理解に興味を持つことは、児童にも好影響を及ぼすはずである。学校全体の雰囲気が、「世界に開かれた」ものになる必要があるのである。

2 調査協力員による授業実践と児童の学び

実践事例1：毎日10分のEnglish Time を取り入れた実践例

(1) 背景

平成13年度から、学校全体の取組として、総合的な学習の時間における国際理解教育の研究を進めている。

「お互いを認め合う児童の育成をめざして」をテーマに、国際理解教育の基本的視点として、A 異文化・自国文化理解、B コミュニケーション能力の育成、C 自他の尊重・人権教育、D 国際協調・平和教育を掲げている。

総合的な学習の時間は、下図のようにA枠・B枠の二つに分けられ、A枠で英語活動、B枠で調べ活動・国際交流活動などを行っている。運用については、学年の意向も尊重しながら柔軟に展開している。

	A 枠	B 枠
視点	英語の歌やゲームによる慣れ	体験・調べ学習等の国際理解の活動
具体的内容	毎日10分間の活動 ・英語の歌やゲーム ・身近な言葉 ・簡単な会話 ・その他	45分の活動 ・調べ学習と発表 ・体験活動 ・文化の理解 ・その他
展開方法	学校統一で展開 ・帯時間を日課に設定する ・8:40~9:00 この間の10分間	学年別で展開 ・年間平均型 ・学期集中型 ・年間集中型等・・・ (学年・内容によつての時間配分)
展開時間数	10分 1週間で時間 計 32時間	総合2時間(1週あたり) (1・2年生は週3回の生活科の中で) 計 73時間 3・4年 計 78時間 5・6年
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> A 32時間 + B 73時間 = 105時間 (3・4年) </div>	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> A 32時間 + B 78時間 = 110時間 (5・6年) </div>	

(2) 授業のねらい

簡単な英会話（この週は、特に動作に関する表現）

(3) 授業の流れ（平成14年9月17~20日, 10分×4日）

「アクションを楽しもう」~3年生

基本的な活動の流れは、

Hello の歌 8つの動作表現 ゲーム である。

これを少しずつアレンジしながら1回10分の活動を4日間展開する。活動は基本的に日本人の担任が行っている。（次頁「授業の流れ」参照）

(4) 児童の学び

Good morning. / How are you? / What time is it now? などの表現を児童は驚くべき速さで身につけた。ペアワークにより児童が多くの子と接する機会を持ち、回を重ねる毎にこの時間を楽しみにする子が増えている。

「授業の流れ」

	指導内容	指導上の留意点	評価の観点
1 日目	歌のCDを1回聞いて、2回目、前半部分だけ一緒に歌う。 教師の動作を見ながら英語での言い方を、繰り返しリピートし練習する。 教師と一緒に英語で言いながら動作をする。	歌える部分は?と興味を持たせる。 できるだけ大きに動作をし、集中させる。 「ちゃんと覚えたね」と励ましながら行う。	知っている言葉を使って、前半部分を歌おうとしているか。 動作の言い方に興味を持ちながら、教師の動作を見ているか。 動作することを楽しんでいるか。
2 日目	Helloの歌の前半部分を児童、後半部分を教師が分担して歌う。 教師の動作を見ながら、8つの英語を覚える。 教師の言葉を聞いて、その動作をする。	できるだけ元気な声で歌う。 とくにhop と jumpの違いをはっきりさせる。 時々フェイントをかけてスリルを持たせる。	教師との分担を楽しみながら、歌っているか。 動作を英語で表現することを進んでいるか。 動作することを楽しんでいるか。
3 日目	後半Ihopthatyou aretoo. を練習し、全体を歌う。 カードの動作をし、その動作をあてるクイズをグループごとにする。 Simonsaysゲームをする。	カードを用意し、掲示しておく。 各グループ8枚の絵と英語入りのカードを1組、計8組用意する。 教師がリーダーになり、やり方が分かるようにゆっくり行う。	新しいセンテンスを積極的に繰り返し練習しているか。 分かったことを、声に出して言ったり、正解しようと、友達の動きに注目しているか。 ゲームに楽しんで参加しているか。
4 日目	Helloの歌全体を歌う。 児童がリーダーになってSimonsaysゲームを行う。 他に英語でなんと言うか、知りたい動作を考える。	身ぶり手ぶりを大きにしながら、児童と一緒に歌う。 聞き取れないところなどは、繰り返し大きな声で言うように示唆したり、代わりに指示したりする。 教師がわかるものについては、「英語で～って言うんだよ」と教える。	歌えるようになった喜びを歌で表現しようとしているか。 友達の指示を聞いて動作しようとしたり、進んでリーダーになるようにしているか。 他の動作の英語についても興味・関心を持つことができたか。

実践事例2：担任主導型でALTとのチーム・ティーチングを行った実践例

(1) 背景

10年程前から、年間3～5回程度ALTの訪問があり、児童はALTに会うことを楽しみにしている。英語活動は、総合的な学習の時間で行われている。これまで授業がALT主導型であったことの反省から、担任が積極的に指導にかかわる実践を試みた。

(2) 授業のねらい

国際理解・異文化体験・簡単な英会話

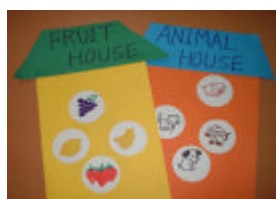
(3) 授業の流れ（平成14年12月3日，今年度5回目）

「これ、なあに？」～6年生

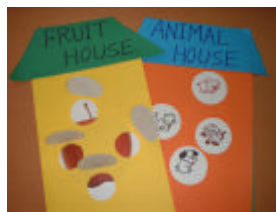
あいさつ：ALTと児童1対1、児童は自分の体調を英語で言う

What's this?: フラッシュカードを使っのペアワーク(児童-児童・児童-ALT)

Open the Window ゲーム:



ALT: Do you like bananas?
児童: Yes! Open the window, please.



担任が音頭をとり、元気よくALTとやりとりをする。ALTは1枚ずつカバーをめくりながら(左の写真)、下に隠れているもの(リンゴ)を当てる。

ALTに聞いてみよう: ALTに、教室内にある物の英語の名前を聞く。

(4) 児童の学び

朝の会で歌(“Hello”)を楽しく歌ったり、保健係が中心に行く健康観察でも、英語で自分の体調を言う場面が見られるようになった。今回の授業の感想からは、「(英語を)覚えると、なんだかとてもうれしくて、英語がますます好きになった」や「外国人としゃべれる日が、いちだんと近くなった気がする」など、英語活動により「達成感」を味わった児童の様子が出た。担任が積極的にかかわり、ALTの訪問に向けて学級活動で準備をしたり、児童が自らALTに質問する機会を設けたりしたことで、充実した時間を過ごすことができた。

実践事例3：英語圏以外からの外国人講師を迎えて国際理解教育を行った実践例

(1) 背景

10年程前から、学期に1回(年3回)程度ALTが派遣されている。最近では、英語圏以外のALTの派遣も多い。英語活動は、総合的な学習の時間で学年あるいは学級毎に行われている。

(2) 授業のねらい

国際理解・異文化体験

(3) 授業の流れ（平成15年1月17日，今年度3回目）

「ブラジル出身のALTを迎えて」～4年生

ALTの自己紹介

挨拶(英語・ポルトガル語)

ブラジルのことを学ぶ(気候・食事・学校, etc.)

ブラジルについての質問

ブラジルの遊び

サンバを一緒に踊ろう

(4) 児童の学び

ポルトガル語が身近でないので多少戸惑っていたが、ポルトガル語の「ありがとう」に男性形と女性形があることを知り不思議に思ったり、日本と異なるジャンケンの仕方----お互いの出した指の本数の合計が奇数が偶数かで勝敗が決まる----の説明を聞いて、みんなで意味を考えたりして楽しんでた。

3 「英語活動」と Multiple Intelligences

調査研究協力員の実践から、児童の新しい側面や能力を発見することができた。事例1では児童の持つすぐれた言語習得(吸収)能力、事例2では児童の英語活動への関心の高さや意欲、事例3からは異文化コミュニケーションに対する児童の順応性を実感することができた。英語活動に「慣れ」が必要なのはむしろ教員の側であることも再認識することができた。

アメリカの心理学者H.ガードナーは、児童の能力をのばすために複数の知能(multiple intelligences)を視野に入れた授業をする必要があると述べている。従来の読み書き計算に加えて、音楽的能力、空間認知能力、運動能力、対人関係能力、自己認識能力、自然鑑賞能力などが発揮できる活動を組み込むことにより、児童の個性を伸ばすことができるというのである。小学校での英語活動には、クロスカリキュラムの要素が含まれており、これらの活動を行う場を多く設定することが可能である。

研究のまとめ

今年度からの数年間は、小学校英語活動が、量的な拡大を見せる時期である。各学校での取組を通して、「子どもと英語との多様な関わりを創造する実践を追求する」(松川 2002) ことが期待される。しかし、そのためには、理想と現実のバランスをとりながら、無理なく継続できる小学校英語活動のありかたを考えなければならない。調査研究協力員の実践や現状報告から、現段階でどの小学校でも実現可能な取組は、以下のような形になるだろう。

年間5～6回のALTの訪問を確保し、それを中心に年間15時間程度の英語活動を計画する(実践校のシラバスを参考に原案作成)
当初の1～2年で、小学校教員がALTとのコミュニケーションに慣れる
地域のボランティア・有識者・英語活動実践校とのネットワークを築き、情報を得る
～ の実践を記録し、シラバスを改善する

いろいろな人との触れあいを通して「英語に慣れ親

しむ場」を設定することにより、コミュニケーションへの積極的態度、人と接する際のマナー、異文化への受容性、国際理解、自国理解が可能になるのである。

「国際理解」という概念は100年後には過去のものになるかも知れない。これからのボーダーレス社会では、むしろ、「グローバル社会の内部での、人と人との相互理解」(“intraglobal” understanding)が必要である。そのために英語の有用性はますます高まるであろう。

おわりに

本研究にあたり、多くの方々のお世話になった。特に、各調査研究協力委員の方々には、資料作成や文献研究、アンケート調査、市販教材モニター等について多大なご協力をいただくとともに、小学校英語活動ビデオ教材制作に際しても、貴重なご意見をいただいた。この場を借りて心から感謝申し上げる。

[調査研究協力員]

藤沢市立亀井野小学校	萩野大作
大和市立引地台小学校	鬼沢明子
中井町立井ノ口小学校	國井恭子
厚木市立緑ヶ丘小学校	佐々木ゆみ子

[教育指導員]

伊藤健三

[長期研修員]

南足柄市立福沢小学校	鈴木秀和
------------	------

引用文献

樋口忠彦他 2001 「小学校英語活動に対する中・高英語教員の態度及び意識に関する研究」(日本児童英語学会『研究紀要』第21号) pp.19-43
松川禮子 2002 「小学校への英語教育導入」(『英語教育』2002年11月号)大修館書店 pp. 28-29
牟田博光他 平成11年 「『小学校における英語活動に関するアンケート調査』報告書」(国・国立小学校における英会話活動の効果に関する分析) 東京工業大学 大学院社会理工学研究科

参考文献

国立教育研究所 平成12年 「昭和62～平成10年度 文部省研究開発学校における研究開発の内容に関する分析的検討(1)」
樋口忠彦(編) 1997 『小学校からの外国語教育』研究社
Anne Guignon 1998 Multiple Intelligences: A Theory for Everyone <www.education-world.com>
H.カーテン,C.A.B.アリウ 伊藤克敏ほか訳 1999 『児童外国語教育ハンドブック』大修館書店